

1 血圧脈波検査で測定される Up stroke  
2 time の有用性について  
3

4 ○後藤光 山田裕美子 小川優 山本祐子 林真希 木  
5 村豊 中村文隆(帝京大学ちば総合医療センター検査  
6 部)  
7

8 **【目的】**閉塞性動脈硬化症 (ASO) のスクリーニング  
9 として ABI が広く用いられている。ABI は簡便で再  
10 現性も良く、重度の ASO 評価もできるが、ABI>0.9  
11 の場合にも下肢動脈エコー等の画像検査では軽度～  
12 中等度の狭窄が認められる症例がある。そこで今回  
13 は同時に測定される項目である Up stroke time (UT)  
14 を用いて下肢動脈における軽度～中等度狭窄病変評  
15 価の有用性を検討したので報告する。

16 **【対象と方法】**2006年6月から2007年12月までに  
17 当院にて ABI と下肢動脈エコー検査を施行したのべ  
18 95人190肢中、下肢動脈エコー検査にて面積狭窄率  
19 75%を超える症例を除外した117肢。0～30%狭窄群  
20 (A群)、30～50%狭窄群(B群)、50～75%狭窄群(C  
21 群)と分類し、多重比較(Scheffe)を用いて比較検  
22 討をABI、UTにおいて行い、危険率5%未満をもっ  
23 て統計学的有意差ありとした。

24 **【結果】**ABIには各群間に有意差は認められなかつ  
25 たがUTではB群、C群ともに有意差が認められた。  
26 (A群  $150 \pm 32$  vs B群  $175 \pm 44$   $p=0.008$  A群 vs C  
27 群  $175 \pm 35$   $p=0.039$ ) B群とC群間には有意差は認  
28 められなかった。(B群 vs C群  $p=1.00$ )

29 **【結語】**狭窄率による分類ではUTが軽度狭窄病変を  
30 鋭敏に反映した。ABIだけではなくUTの結果にも留  
31 意することでスクリーニングにおけるABIの価値を  
32 さらに高めることができると考えられる。

33 0436-62-1211 (内線 1202)  
34  
35  
36  
37  
38  
39